

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00070

研究課題名（和文）仏教論理学派が紹介・批判するジャイナ教学説の総合的研究：存在論と認識論の観点から

研究課題名（英文）Comprehensive study of Jaina views introduced and criticized by Buddhist logicians: from ontological and epistemological perspectives

研究代表者

志賀 浄邦 (SHIGA, Kiyokuni)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：60440872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ダルマキールティをはじめとする仏教論理学者たちはジャイナ教徒が主張する多面的実在論を紹介・批判するが、その仕方は仏教論理学者たちの中で異なっている。またこの多面的実在論はある時期を境にジャイナ教徒空衣派に属するサマンタパドラ（7世紀頃）による見解と見なされるようになったように、ミーマーンサー学派のクマーリラ（7世紀頃）の言明と組み合わせられた形で紹介されるようになった。当研究全体を通じて、「仏教論理学派がジャイナ教学説を再現しようとする際、カルナカゴーミンの時代からジャイナ教学説が「編集」もしくは「パッケージ化」されるようになった」という仮説の妥当性を一定程度検証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当研究課題において主たる考察対象とした『真実集成』のような、対論者の見解が紹介され批判される形式をとる哲学文献においては、自派（『真実集成』の場合は仏教徒）以外の他学派の見解がどのような形で記述されているかについて注意を払う必要があるが、他学派の見解が「編集」や「パッケージ化」のプロセスを経て再現されるという視点でテキスト批評を行おうとする試みはこれまで皆無であった。当研究はジャイナ教学説のみを対象としているものの、この視点と手法は対サーンキヤ学派や対ニヤーヤ学派など学派の見解に対しても応用できる可能性がある。その意味で、当研究は方法論的にも汎用性の高い学術的成果をもたらしたと言える。

研究成果の概要（英文）：Buddhist logicians, including Dharmakirti, introduced and criticized the theory of multifaceted reality advocated by Jains, but the ways of reference and criticism differ among Buddhist logicians. In addition, this theory seems to have come to be regarded as the view of Samanthabhadra at some point, and was introduced in a way that his view was combined with Kumarila's statement. Throughout this research, I could verify to some extent the validity of the hypothesis that Jain doctrines have been "edited" or "packaged" since the time of Karnakaghomin when Buddhist logicians reproduced Jain doctrines.

研究分野：印度哲学・仏教学

キーワード：ジャイナ教 多面的実在論 内遍充 仏教論理学派 シャーンタラクシタ カマラシーラ 『真実集成』 アルチャタ

1. 研究開始当初の背景

(1) 紀元前6 - 5世紀頃、古代インドにおいてほぼ同時期に成立した仏教とジャイナ教という二つの宗教は成立当初から多くの共通点を有していた。両者の共通点とは、例えば、当時のインドにおいて支配的であったバラモン教が依拠するヴェーダ(天啓聖典)の権威を認めなかったこと、バラモンを頂点とするカースト制度に反対の姿勢を取ったこと、創造主としての神を認めない無神論の立場に立ったこと、不殺生・非暴力主義を掲げ生命の尊重を唱えたことなどである。また両者はともに、論理的思考や合理性、物事を認識・理解する際の客観性や中立性を重んじ、後に高度な認識論・論理学の体系を構築した。一方で両宗教はそれぞれ独自の教義や世界観を持っていたため、存在論や認識論については互いに異なる学説を構築することになる。事物の存在の仕方に関してジャイナ教徒は、あらゆる事物は同時に 実体 というあり方と 様態 というあり方として実在し、両者はある点から見れば異なり、別の点から見れば異なる(異・不異)と主張する。このジャイナ教の存在論は 多面的実在論 と呼ばれる。一方、仏教認識論・論理学を確立したダルマキールティ(7世紀頃)は実在を「効果的作用をなす能力(目的実現能力、因果効力)をもつこと」と定義したが、彼以後の仏教徒の存在論はこの定義に依拠して構築されることとなる。仏教徒はジャイナ教徒の多面的実在論に対して、単一の事物が2つ以上の相反する性質をもつことは不可能であること、そもそも実体と様態が本質的に同一物であれば名称等による違いもありえないことなどを主張し、ジャイナ教の多面的実在論を否定する。ジャイナ教学説を紹介し批判する仏教論理学者として、アルチャタ(8世紀頃)、シャーンタラクシタ(8世紀頃)、カマラシーラ(8世紀頃)、カルナカゴーミン(8世紀頃)、ジターリ(10世紀頃)、ドゥルヴェーカミシュラ(10 - 11世紀頃)等を挙げることができるが、彼らのジャイナ教学説の紹介・批判の仕方は一定していない。

(2) 報告者がジャイナ教と仏教の関係に関心をもったのは、2006年に京都大学に提出した博士論文において仏教論理学とジャイナ教論理学の比較を行ったことに始まる。当該論文において対象とした主なテキストは『真実集成』及び『真実集成細注』(以下『細注』と略)の第18章「推理の考察」であったが、同章には対論者としてジャイナ教論理学者パートラスヴァーミンが登場し、論証因の一条件を主張する。これはディグナーガ以来仏教徒によって主張されていた論証因の三条件に対抗する形で提示されたものであるが、後代のジャイナ教の伝統において<内遍充>と同一視されるようになり、「あらゆるものは多面的である」という命題を論証する強力な装置として用いられるようになる。一方、ダルマキールティ以降の仏教徒たちは、瞬間的存在(刹那滅)論証に注力するようになるが、この論証の主題は「あらゆるもの」であり主題の外部に具体的事例を求めることができない以上、論理形式としては内遍充にならざるをえない。こうして両者は奇しくも論理学上の見解において接近することになる。『真実集成』の著者シャーンタラクシタと同時代を生きたアルチャタは自身の著作である『論証一滴論注』において論証因の三条件と親和性の高い外遍充を否定しているが、刹那滅論証においては事実上内遍充を適用している。一方でアルチャタは、ジャイナ教の多面的実在論に対して真っ向から批判を展開するが、申請者はこのアルチャタとジャイナ教徒の論争について2013年に発表した論文(志賀浄邦、Conflicts and Interactions between Jaina Logicians and Arcata 『ジャイナ教研究』第19号、pp.19-68)において考察する機会があった。同論文では推理論における両派の相互交渉と存在論における対立をそれぞれ別立てして論じることはできたものの、その両者の関係について十分に検討することはできなかった。以上のような経緯から、アルチャタに関する原典・思想研究を踏まえた上で、同じ8世紀の作品である『真実集成』及び『細注』に現れるジャイナ教学説を網羅的に収集し、その全体像について総合的な視座から明らかにすることが必要であると考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 上述の通り、仏教論理学派はジャイナ教徒が主張する多面的実在論を紹介・批判するが、その仕方は仏教論理学者たちの間で異なっている。またこの多面的実在論はある時期を境にサマータパドドラ(ジャイナ教徒、7世紀)による見解と見なされるようになったようで、クマーリラ(ミーマーンサー学派、7世紀)の言明と組み合わせられた形で紹介されるようになる。この点について報告者は、2019年に発表した論考(Dialogues on substance (*dravya*) and modification (*pariyaya*) between Jaina and Buddhist philosophers: origin and development、『ジャイナ教研究』第25号、pp.17-73)において、仏教論理学派がジャイナ教学説を再現しようとする際、カルナカゴーミン(8世紀)の時代からジャイナ教学説が「編集」もしくは「パッケージ化」されるようになったという仮説を提示した。当研究の目的の一つはこの仮説を検証することであった。対論者の見解が紹介され批判される哲学文献においては、他学派の見解がどのような形で記述されているかにつ

いて注意を払う必要があるが、他学派の見解が「編集」や「パッケージ化」のプロセスを経て再現されるという視点でテキスト批評を行おうとする試みはこれまで皆無であった。当研究はジャイナ教学説のみを対象としているものの、この視点と手法はサーンキヤ学派やニヤーヤ学派など他学派の見解に対しても応用できる可能性がある。その意味で、当研究は汎用性の高い学術的成果を生み出す可能性が高いと言えよう。当研究では、『真実集成』及び『細注』においてジャイナ教徒の見解として紹介されているパッセージを網羅的に収集し全体像を描き出した上で、それらの間にどのような関係性—例えば体系性、一貫性、整合性、変遷や発展、矛盾、逸脱等—があるのかを検討した。

(2) 以上のような仏教徒とジャイナ教徒の対論の歴史を考察するにあたっては以下の2つの問いを設定し、その解明を試みた。

8世紀の仏教論理学者アルチャタ、シャーンタラクシタ、カマラシーラは、ジャイナ教の中心思想の一つである多面的実在論をどのように紹介・再現し批判したのか。また仏教論理学者たちの間で、紹介・批判の仕方はいかなる相違があったのか。あったとすればそれらはどのように変遷したのか。

仏教論理学者が把握していたジャイナ教学説の全体像はどのようなものであったのか。さらにジャイナ教徒が主張する存在論と認識論・推理論はいかなる関係にあったのか。

3. 研究の方法

当研究課題では、以下の3つの手順・方法によって研究を進めた。

(1) 『論証因一滴論注』に見られるジャイナ教学説とそれに対する批判部分の研究
ダルマキールティ以降の仏教認識論・論理学の系譜の中で、本格的にジャイナ教批判を開始したのはアルチャタであったと考えられる。そのため、彼の著作『論証因一滴論注』に紹介されるジャイナ教学説とそれに対する批判部分を解説し、校訂テキストと正確な現代語訳及び訳注を作成することから研究を開始した。テキスト校訂と翻訳作業については、後代のジャイナ教文献に見られる並行箇所と比較対照しながら行ったが、この原典研究によって得られた知見をベースにジャイナ教徒の見解に見られる存在論・認識を抽出し、内容分析を行った。一方、アルチャタは別の箇所ではジャイナ教徒が用いるのと同様の論理で「外遍充」を批判し、誤った推論の例としてもジャイナ教徒と同じものを挙げている。推理論におけるアルチャタとジャイナ教徒の関係性についても考察の対象とした。

(2) 『論理一滴論注』の復注研究

『論証因一滴論注』に対するドゥルヴェーカミシュラによる復注『論証因一滴論注の光』の解釈を確認することにより、『論証因一滴論注』の当該箇所の校訂テキストと翻訳の精度を上げるよう努めた。また『論証因一滴論注』に対する新発見の復注を参照し、同書当該箇所の読解に役立てるとともに、写本からの文字起こしとテキストの作成を試みた。その際、ドゥルヴェーカミシュラの師匠にあたるジターリが著したジャイナ教批判の小論(『ジャイナ教徒の見解の考察』)も参照しつつ、ドゥルヴェーカミシュラの復注と新発見の復注の関係を探った。

(3) 『真実集成』及び『細注』に現れるジャイナ教学説の収集と分類・テキスト分析

仏教徒が紹介・批判するジャイナ教学説の全貌を知るためには、まず関連するパッセージを収集することが必須の作業となるが、その際『真実集成』及び『細注』は絶好の情報源となる。報告者は以前より、『真実集成』及び『細注』第7章4節「ジャイナ教徒の構想するアートマンの考察」、第17章「直接知覚の定義の考察」、第18章「推理の考察」、第20章「相対論の考察」、第23章「外界対象の考察」においてジャイナ教学説が紹介されていることを確認済みであったが、それぞれの章に対するこれまでの研究を見直した上で、当該箇所の校訂テキストの作成と解説の作業を進めた。その際、反論者の見解として現れるジャイナ教徒の学説をジャイナ教文献において同定可能であるかどうかについても合わせて検討した。また上記の章のうち、特に全編がジャイナ教学説の紹介と批判で構成される「ジャイナ教徒の構想するアートマンの考察」章を精読し、テキスト校訂と翻訳の作業を行った。

上記(1)~(3)の研究結果を踏まえて、アルチャタが紹介するジャイナ教学説とシャーンタラクシタ、カマラシーラが紹介するそれとを比較し、両者の紹介・批判の仕方の相違点と共通点を探った。

4. 研究成果

(1) 2019年度は主に、申請当初に立てた二つの問いのうち、「8世紀の仏教論理学者アルチャタ、シャーンタラクシタ、カマラシーラは、ジャイナ教の中心思想の一つである多面的実在論をどのように紹介・再現し批判したのか。また仏教論理学者たちの間で、紹介・批判の仕方はいかなる相違があったのか。あったとすればそれらはどのように変遷したのか」という問いについて取り組んだ。この多面的実在論はある時期を境に、ジャイナ教徒のサマンタパドらの言明とミ

ーマーンサー学派のクマーリラのそれとを組み合わせる形で紹介されるようになる。この点について申請者は、仏教徒がジャイナ教学説を再現しようとする際、カルナカゴーミン(8世紀)の時代からジャイナ教学説が編集もしくはパッケージ化されるようになったのではないかと推測し、2019年9月に公開された拙稿 "Dialogues on substance (dravya) and modification (pariyaya) between Jaina and Buddhist philosophers: origin and development" (「実体と様態をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論：その淵源と展開」)ではその仮説の検証を試みたが、それがおおむね妥当であるという結論に至った。当論稿ではジャイナ教学説に関してのみ扱ったが、この視点と手法はサーンキヤ学派やニヤーヤ学派等、他学派の見解に関しても応用できる可能性がある。

(2) シャーンタラクシタ、カマラシーラ師弟の著作である『真実集成』と『細注』は全26章からなる大部の綱要書であるが、前述の通り少なくとも同書の4つの章においてジャイナ教学説が紹介・批判されている。それらは大別して、存在のあり方(存在論)、存在の把握のされ方とその方法(認識論)、推理論(論理学)という3種に分類することができる。2020年度は特に推理論(論理学)について研究を進めた。『真実集成』第18章「推理の考察」においては、ジャイナ教論師パートラスヴァーミン(7-8世紀)による論証因一条件説が紹介されている。これはディグナーガ以来主張されていた論証因の三条件に対抗する形で提示されたものであるが、後代のジャイナ教の伝統において内遍充論と同一視されるようになり、「あらゆるものは多面的な存在である」という命題を論証する強力な装置として用いられるに至る。一方、ダルマキールティ以降の仏教徒たちは、瞬間的存在(刹那滅)論証に取り組むようになるが、この論証も論理形式としては内遍充論を適用せざるをえないため、両者は奇しくも論理学上の見解において接近することになる。当該年度は主に上記「推理の考察」章のうち、パートラスヴァーミンと仏教徒の対論箇所を精読し、テキスト校訂と翻訳の作業を行った。なお、同章の翻訳研究についてはすでに公表済みであるが、より正確な校訂テキストの出版を目指して再校訂の作業を進めている。なお内遍充論は、最終的に仏教徒にとっても瞬間的存在論証を行うための重要な論理装置となるが、特にアルチャタは内遍充の対概念である外遍充を直接的に批判しているため、これまでも研究者の間で彼が内遍充論者と見なされることが少なからずあった。今回の研究を通じてその問題に関しても新たな知見を得ることができた。

(3) 2021年度は主に、シャーンタラクシタによる『真実集成』とその弟子カマラシーラによる『真実集成細注』に現れるジャイナ教学説の収集と分類、またテキスト分析を行った。報告者は、以前より『真実集成』及び『真実集成細注』第17章、第18章、第20章、第23章においてジャイナ教学説が紹介されていることを確認していたが、それぞれの章に関するこれまでの研究を批判的に見直した上で、当該箇所の校訂テキストと翻訳の作成に着手した。その際、反論者の見解として現れるジャイナ教徒の学説をジャイナ教文献において同定可能であるかどうかについても合わせて検討した。今年度は上に挙げた章のうち、特に第7章第4節「ジャイナ教徒の構想するアートマンの考察」、第17章「直接知覚の定義の考察」に現れるスマティ他のジャイナ教徒の学説について精査するとともに、テキスト分析を行った。なお、2022年3月には『真実集成』及び『細注』全体の解題とこれら2作品のうち3章分のテキストと翻訳を収録した図書『シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究—業報・論理・時間—』を出版した。同書は、第18章「推理の考察」の校訂テキスト、和訳と訳注の他、同章に見られるジャイナ教学説とそれに対する仏教徒の批判に関する分析を含んでいる。

(4) 2022年度は主に『真実集成』及び『真実集成細注』に現れるジャイナ教学説の収集・分類とテキスト分析を行った。仏教徒が紹介・批判するジャイナ教学説の全貌を知るためには、まず関連するパッセージを収集することが必須の作業となるが、その際『真実集成』及び『真実集成細注』は絶好の情報源となる。当該年度は前年度に引き続き、上記の章のうち特に全編がジャイナ教学説の紹介と批判で構成される第7章第4節「ジャイナ教徒の構想するアートマンの考察」章のテキスト校訂と翻訳の作業を行った。さらに第17章「直接知覚の定義の考察」、第20章「相対論の考察」、第23章「外界対象の考察」に現れるジャイナ教学説についてもテキストの解読と分析を進めた。上記の研究を経て、研究開始当初から取り組んでいたテーマのうち「仏教論理学派が把握していたジャイナ教学説の全体像はどのようなものであったのか。さらにジャイナ教徒が主張する存在論と認識論及び推理論はいかなる関係にあったのか」という問いに関して一定の結論を得ることができた。当該年度の主な研究成果としては、2022年10月に行われた第37回ジャイナ教研究会での口頭発表(発表タイトル:「仏教論書 *Tattvasamgraha*(-panjika)とジャイナ教徒の関係」)を挙げることができるが、そこで最終的に提示した結論は以下のようなものである。

『真実集成』及び『細注』がジャイナ教徒の手によって書写され、現在に至るまで保存・継承されていた明確な理由は定かではないが、同書の中にジャイナ教徒の名前(空衣派)やジャイナ教の代表的思想に対する呼称(相対論/蓋然論)を冠する複数の章(第20章)が含まれていること、スマティやパートラスヴァーミンなど、ジャイナ教徒にとっても重要な人物であった思

れる論師たちの見解が人物名とともに収録されていること、インド哲学諸派や仏教内部の諸見解を収集し簡潔な形で提示した『真実集成』と『細注』が相対論や多面的実在論を奉じるジャイナ教徒にとって、「思想の百科全書」的な存在として評価された可能性などをその理由として指摘することができる。

『真実集成』及び『細注』において固有名が挙げられる論師は、スマティとパートラスヴァーミンのみであるが、そのうちパートラスヴァーミンについてはアカランカを始めとする後代のジャイナ教論師たちによっても言及されており、いわばジャイナ教論理学の祖と見なされていた可能性が高い。また彼が構築した推理論（論証因の一条件）には、ミーマーンサー学派の影響（論理的要請）があったことも確認された。一方スマティは、主に多面的な実在と認識（知覚）の関係に関して独自の主張を展開しているが、彼の認識論がジャイナ教認識論の伝統の中でどの程度影響力をもっていたかは定かではない。ただし、碑文の情報によると、スマティもジャイナ教における師資相承の系譜の中に位置づけられており、認知度は高かったと思われる。また、スマティの認識論（知覚とその対象に関する見解）においてはミーマーンサー学派（クマーリラ）やヴェーダーンタ学派の影響も垣間見られる。

『真実集成』及び『細注』第20章「相対論の考察」と第21章「三時の考察」は一見全く異なる主題を扱っているように見えるが、カマラシーラによると、章をまたいで連続した議論が展開されている。TSP第21章の冒頭においては、ジャイナ教徒とミーマーンサー学派の主張する存在論と説一切有部の三世実有論が種々の点で類似していることが指摘されている。

シャーンタラクシタもカマラシーラも、ミーマーンサー学派の存在論とジャイナ教徒のそれが類似していることを言明しているが、第7章「アートマンの考察」に収録されているそれぞれの学派の見解（例えば第222偈と311偈）を比較すればそのことが一層明らかになる。ただし両派には使用する用語の相違も見られる。第7章第4節「ジャイナ教徒によって構想されたアートマンの考察」はアートマン論を主題としつつも存在論一般に適用されうる内容を含んでおり、

『真実集成』及び『細注』全体として見るとジャイナ教の存在論の基本テーゼを提示する役割を担っている。さらに第20章は第7章第4節において述べられた内容を前提としており、より発展的な議論が展開されている。

ジャイナ教徒とミーマーンサー学派の見解のちがいが明確に示されるのは、概念知を伴わない（無分別の）知覚の対象に関してスマティがクマーリラの見解を批判する箇所（第17章）と、クマーリラが仏教徒とジャイナ教徒の一切智者論証を批判する箇所（第26章）においてであることが判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 志賀 浄邦	4. 巻 No. 78
2. 論文標題 Jaina Doctrines transmitted by Tibetan Buddhists	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (『東洋文庫欧文紀要』)	6. 最初と最後の頁 85-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀 浄邦	4. 巻 第36巻
2. 論文標題 B. R. アンバードカルの改宗論：「知的亡命」としての仏教への改宗	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学世界問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 志賀 浄邦	4. 巻 25
2. 論文標題 Dialogues on substance (dravya) and modification (pariyaya) between Jaina and Buddhist philosophers: origin and development (「実体と様態をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論：その淵源と展開」)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジャイナ教研究	6. 最初と最後の頁 17-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀 浄邦	4. 巻 38
2. 論文標題 プラグマティズム という視座から見たインド仏教	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都産業大学世界問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 37-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 志賀 浄邦
2. 発表標題 B. R. アンベードカルの改宗論：「知的亡命」としての仏教への改宗
3. 学会等名 京都産業大学世界問題研究所・定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 志賀 浄邦 (SHIGA Kiyokuni)
2. 発表標題 On the relationship between the validity of two kinds of pramana and the Buddha's teachings
3. 学会等名 6th International Dharmakirti Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 志賀 浄邦
2. 発表標題 プラグマティズム という視座から見たインド仏教
3. 学会等名 京都産業大学世界問題研究所・定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 志賀 浄邦
2. 発表標題 仏教論書Tattvasamgraha(-panjika)と ジャイナ教徒の関係
3. 学会等名 第37回ジャイナ教研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 志賀 浄邦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 起心書房	5. 総ページ数 582
3. 書名 シャーンタラクシタ『真実集成』の原典研究 業報・論理・時間	

1. 著者名 志賀 浄邦 (SHIGA Kiyokuni) 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 The Austrian Academy of Sciences	5. 総ページ数 555
3. 書名 Reverberations of Dharmakirti's Philosophy. Proceedings of the Fifth International Dharmakirti Conference Heidelberg, August 26 to 30, 2014 (Kiyokuni SHIGA: The Meaning of bahyartha in Dignaga's and Jinendrabuddhi's Theories of Inference, pp. 411-427)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------